

普及項目	増殖
漁業種類等	刺網、流し網
対象魚類	クルマエビ
対象海域	熊本有明海

## 網田漁協が実施する囲い網施設によるクルマエビ中間育成の技術指導

県北広域本部水産課・内川 純一

### 【背景・目的】

網田漁協では、クルマエビ資源の増加を目的に、中間育成を含めた種苗放流を毎年行っている。水産課では、近年不安定となっている中間育成の生残率の向上・安定化を目的として技術的な支援を行っている。なお、今年度は、前年度に引き続き将来的な技術移転も併せて技術指導を実施することを目的とした。

### 【普及の内容・特徴】

#### (1) 中間育成

令和2年（2020年）6月10日に漁業者が設営した3基の囲い網に稚エビ（網入れ時48日齢、P37、平均体長16.9mm）を約48万尾（各網16万尾ずつ）収容した。なお、水産課が試算した給餌量に基づき、令和2年（2020年）6月10日～7月4日の25日間、漁業者が当番制でクルマエビを育成した。また、前年度に続き、作業効率化のための囲い網の小型化（直径24m→20m）が行われ、中間育成の配置は図1のとおりとなった。

#### (2) 生残率等調査

水産課では、中間育成期間中の稚エビの生残率や成長を把握するため、令和2年（2020年）6月25日と7月2日に調査を実施した。将来、事業実施主体である漁業者と宇土市が主体的に調査していけるよう、当日は漁業者と種苗購入費補助者の宇土市職員へ作業を指導した。

### 【成果・活用】

中間育成の生残尾数は430千尾（生残率90%）と推定された。昨年度の結果（37%）と比較すると高い生残率となった。また、放流前日の平均体長は38.1mmで、昨年度の平均体長が小さかった。囲い網ごとの生残率及び成長について、いずれも目立った違いは確認されなかった。生残率が良好であった要因としては、悪天候による中間育成施設の破損や給餌回数の減少が少なかったことが考えられた。また、昨年よりも平均体長が低かった理由としては、生残率が高くなったことで、囲い網内の収容密度が昨年度よりも高くなり、相対的に種苗の成長が抑えられたことが考えられた。

### 【達成度自己評価】

3 おおむね達成できたが、取組に改善を要する等の課題も見られた（51～75%）

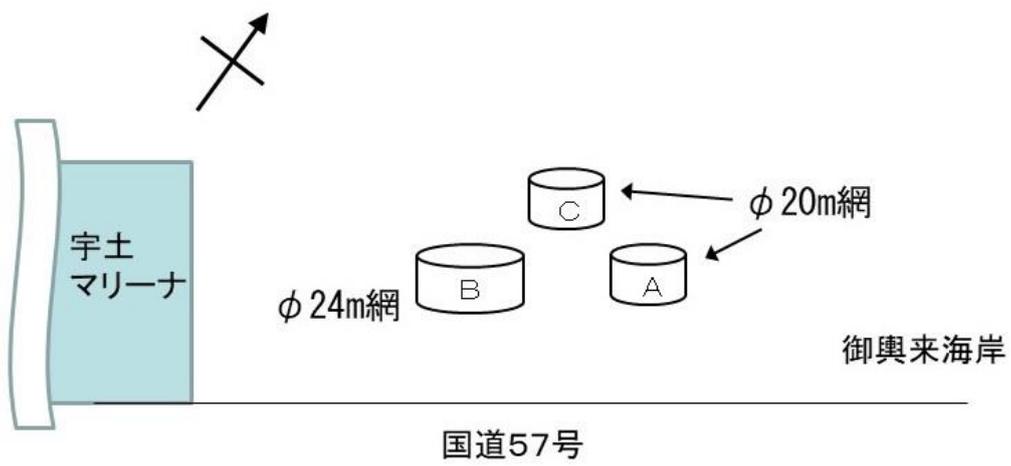


図1 囲い網配置図



図2 囲い網全景



図3 育成状況（給餌）



図4 生残率等調査（枠取り）

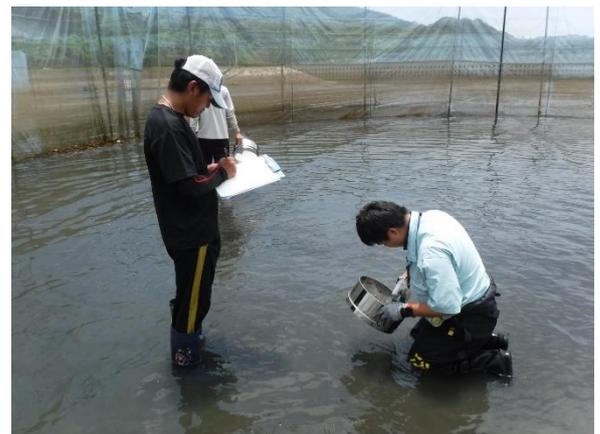


図5 生残率等調査（計数）